

令和2年度 考古学ゼミナール

# となりの“くに”と相模



相模と周辺の  
“くに”  
の関係をひも解く！

## 令和2年度 考古学ゼミナール

# 「となりの“くに”と相模」

### ◆日程 ※各講の後に質疑・休憩

開講式	10月17日(土)	13:00~13:10
第1講	同	13:10~14:40
第2講	同	15:00~16:30
第3講	10月24日(土)	13:00~14:30
第4講	同	15:00~16:30
第5講	10月31日(土)	14:00~16:00
修了式	同	16:20~16:30

### ◆要旨集 目次

講師紹介	…2
講義要旨	
第1講 「甲斐の縄文文化と相模」	…3
帝京大学文化財研究所講師 榑原 功一	
第2講 「駿河の弥生文化と相模」	…11
静岡大学人文社会科学部教授 篠原 和大	
第3講 「古代の武蔵と相模」	…15
国分寺市教育委員会ふるさと文化財課 依田 亮一	
第4講 「中世の伊豆と相模」	…29
伊豆の国市文化財課 池谷 初恵	
第5講 「房総の古墳時代と相模」	…39
千葉大学教授 山田 俊輔	

# 講師紹介

## ◆櫛原 功一（くしはら こういち） 帝京大学文化財研究所講師

【専門・研究テーマ】縄文時代中期の集落研究、キルギス共和国アク・ベシム遺跡の研究、古代瓦生産、須恵器生産と流通（天狗沢瓦窯跡を中心に）、山岳寺院・山岳遺跡、亀甲塚古墳の研究。

【著書・論文等】2004「台形土器の研究」『山梨文化財研究所 研究報告』12、2008「曾利式土器」『総覧縄文土器』、2009「竪穴住居の形式（中期）」『縄文時代の考古学』8、2015「竪穴住居における縄文尺の検討」『縄文時代』26

## ◆篠原 和大（しのはら かずひろ） 静岡大学人文社会科学部教授

【専門・研究テーマ】日本考古学（弥生時代）

登呂遺跡を活用した実験考古学・比較考古学的研究。弥生時代の農耕具や工具を復元して、当時に近いかたちに復元された登呂遺跡の復元水田で使用しながら、実験考古学的に分析し、そこから日本列島の初期農耕文化の実態を比較考古学的に考察していく研究。

【著書・論文等】2019「農耕文化の形成と登呂遺跡」『大学的静岡ガイド』昭和堂、2012「植物資料から見た静岡清水平野における農耕の定着過程」『静岡県考古学研究』43（共著）、2011『手越向山遺跡の研究』六一書房、静岡大学人文学部考古学研究室（編著）

## ◆依田 亮一（よだ りょういち） 国分寺市教育委員会ふるさと文化財課史跡係長

【専門・研究テーマ】日本考古学（奈良・平安時代）

最近の仕事との関わりで、武蔵国分寺・東山道武蔵路を中心とした古代の地方寺院・交通制度、江戸時代の用水路（玉川上水の分水）に関心を持っています。

【著書・論文等】2014「神仏と山川さんせんそうたく藪沢の開発－鎌倉郡沼濱郷ぬまはまごう－」天野努・田中広明編『古代の開発と地域の力』高志書院、2019「奈良・平安時代」『小金井市史 通史編』小金井市史編纂委員会、2020『国分寺市重要史跡 恋ヶ窪村分水の調査』国分寺市教育委員会

## ◆池谷 初恵（いけや はつえ） 伊豆の国市教育委員会文化財課文化財調査員

【専門・研究テーマ】中世考古学

伊豆を中心とした東国の中世武士本拠地の様相を遺跡から明らかにする。具体的には、遺跡の立地や街道、遺構の消長、遺物様相の特徴や質・量の変化から、武士居館や寺社等の実像を追及している。

【著書・論文等】2004「東国境界域の白いかわらけ」『中世東国の世界2 南関東』高志書院、2010『鎌倉幕府草創の地－伊豆韮山の中世遺跡群－』新泉社、2018「中世初頭の東国の京都系かわらけにみる技術の導入と変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』第210集 国立歴史民俗博物館、2020「伊豆・駿河・遠江」『中世瓦の考古学』高志書院

## ◆山田 俊輔（やまだ しゅんすけ） 千葉大学大学院人文科学研究院教授

【専門・研究テーマ】古墳時代の研究。近年は海民などの遊動的な人々と王権、国家の関係について特に関心をもって調べている。

【著書・論文等】「鹿角製刀剣装具の系列」『日本考古学』42、「古墳時代洞穴墓葬の類型」『考古学研究』64-4、「6～9世紀における卜骨、卜甲出土遺跡の研究」『古代文化』71-1

## 甲斐の縄文文化と相模

帝京大学文化財研究所講師 榑原 功一

### はじめに

縄文時代の甲斐（山梨県）と相模（神奈川県）との関係について、類似点や相違点を通じて考える。稲荷木遺跡を見学して感じたこと、山梨での縄文時代研究に関する最近のトピックを交え、私の縄文集落観を織り混ぜてお話ししたい。

### 1 甲斐と相模との関わり

甲斐と相模は、相模川の上流にあたる桂川が富士東麓を源流とする関係上、郡内地域と国境を接し、古くからこのルートを中心とした交流がみられる。

旧石器時代、縄文時代には、黒曜石などのモノの移動がある。和田峠産等の諏訪地方の黒曜石が甲府盆地を経由して関東一円に流通したほか、その逆に神津島・伊豆箱根系の黒曜石が甲府盆地で出土する。また縄文土器型式の分布によれば、中期後半の曾利式土器は西関東から静岡方面にかけて富士山麓を巡るように分布し、相模川流域には曾利式土器を多く伴う遺跡が点在している。また釈迦堂遺跡群（甲州市、笛吹市）からは縄文早期のハマグリが見つかったが、釈迦堂遺跡群では富士溶岩の発見で推測されるように、御坂山地を越えた甲府盆地東部と富士北麓の活発な交流が想定されるほか、甲府盆地東部は桂川の支流、笹子川を通じて相模川流域、相模地域とつながっていた。

そもそも甲斐は、近年の平川南氏の説によれば「交ひ」であり、東山道と東海道が交差する接点であった。古代には甲府盆地を二分する勢力圏が形成され、東海道上に位置する東の勢力（姥塚古墳）、東山道支道につながる西の勢力（加牟那塚古墳）があったが、後者には国府、国分二寺が設置され、古代甲斐国の中心となる。相模との関係では、相模型土器、甲斐型土器の出土状況から奈良、平安時代における地域間交流がうかがえるが、相模と甲斐の間では国境争いが生じるなど、密接で曖昧な地域であった。この時期の考古学的な発見としては、御所遺跡（大月市）の平安時代（9世紀後半）の3号竪穴住居竈内から抽出されたマイワシの骨があり、相模湾のイワシが保存食として流通したことを推定させる。また近年、甲斐国内では8世紀～9世紀代を主とする製塩土器が各地で見つかっており、相模湾、駿河湾沿岸での土器の出自が検討されている。また中世の事例として、勝沼氏館跡（甲州市）では、16世紀代のアジやタイなどが出土している。

### 2 山梨県での近年の考古学的調査の成果

大規模調査が減るなか、山梨県内ではいくつかの考古学的成果が注目される。

#### A ダイズ圧痕の発見と圧痕調査の広がり

2007年、酒呑場遺跡（北杜市）の深鉢把手（井戸尻式期）のダイズ圧痕が中山誠二氏により発見

されたのち、各遺跡で土器の圧痕調査が行われ、多数のデータが得られている。とくに北杜市では、整理作業に圧痕調査を組み込み、顕微鏡観察から同定までを自前で行うなど、佐野隆氏による精力的な調査が実施されている。そうした成果として、アズキ、ダイズなどの様々な種実圧痕、家屋内昆虫を中心とした昆虫圧痕が検出され、小畑弘己氏のいうように土器作りに関する情報が得られつつある。

#### B 土器作りの場の解明に向けて

2013年、前付遺跡（笛吹市境川町）では曾利Ⅱ式期の竪穴住居の奥壁寄りの位置から砂を入れた土器、鉢形土器、台石、2段重ねの焼成粘土塊が発見された。土器作りが竪穴住居内の神聖な空間で行われたことを意味するもので、文様施文を密かに行うという民族誌の記述を彷彿させる。

#### C 梅之木遺跡の整備と活用

2018年に完成した国史跡梅之木遺跡公園（北杜市明野町）では、天窓式の土葺き屋根をもつ竪穴住居が復元され、年間1軒程度ずつ、市民との共同作業で竪穴住居の復元が行われている。天窓付の竪穴住居内は、室内が明るく、土器作り等の作業ができると感じた。

#### D 五領ヶ台式期の住居内出土の大形石棒

桑森遺跡（北杜市明野町）では、2019年に五領ヶ台Ⅰ式期の竪穴住居床面中より、横位の状態で大形石棒が出土した。国内最古級、山梨県内最大級の事例で、節理面を残す初現的な特徴がある。石棒は当初より住居内祭祀具として用いられたことを示す事例といえる。

#### E 水晶の産地同定手法の開発

甲府盆地内にはいくつかの水晶産地がある。甲府盆地を取り巻く山々が花崗岩からなることから、良質な粘土とともに石英を産し、金峰山周辺の乙女鉦山、甲州市塩山の竹森鉦山などが著名である。水晶は、縄文時代には石鏃を中心に利用され、古墳時代には切子玉や勾玉などに用いられたが、2017年、金井拓人氏（帝京大文化財研究所）により科学分析による産地推定法が開発され、最近では反町遺跡（埼玉県東松山市）の玉作り工房の水晶が竹森産と推定されるなどの成果があがっている。

### 3 縄文時代の世界観と集落研究

かつて土器型式研究と並ぶ研究テーマであった集落論は、ここ数年、論文数の減少が著しい。私は竪穴住居型式、集落の構造分析に取り組んできたが、その延長線として世界観について考えるようになった。

まず竪穴住居型式の分析として、土器型式圏に相当する集団分布を住居型式分布から明らかにすべく、唐草文土器圏と曾利式土器圏の比較を行った。唐草文土器圏の住居型式には規格性があり、曾利式土器圏のそれとは区別ができる。また加曾利Ⅴ式土器圏では地域ごとに住居型式が想定される。

また中期の環状集落について、遺跡ごとに竪穴住居の形、柱穴配置を分析すると（図1）、分節的な小群のまとまりや、集落を2分するような軸線構造がうかがえる。縄文中期に集落は、地形的な高低、東西南北の方位を意識した意図的な集落設営が行われた可能性をうかがわせている。

竪穴住居は、居住者にとって最も身近な空間であり、その構造は縄文人の空間認識を凝縮したものである。住居のまとまりは、ときに環状のムラを形成するが、その形や構成は住居の平面形に似

ている。集落の中には土坑墓群が形成されるが、それもまた住居のまとまりに似せた死者のムラで、個々の墓は住居の形に似ている。また住居の中心に位置する炉もまた、住居の形や柱穴配置に似せて石囲いで作られた例がある。

このように住居、集落は世界観の表現形であり、入れ子の関係性が認められる。これらの事象から、縄文人が居住空間、世界をどのように認識していたのかが理解できるのではないだろうか。

#### 4 炉石にみる世界観（図2）

曾利式期の後半（曾利Ⅳ～Ⅴ式期）になると、炉石の奥壁側に「山形の炉石」を立てて据え、その住居の主軸延長線上に三角形の山が位置する例がある。これまでに発見された数は多くないが、八ヶ岳南麓付近を中心とした甲信地域に存在し、上原遺跡（北杜市）、下原山北遺跡（原村）、八幡屋敷遺跡（伊那市）例などを典型とする。山形の炉石は背後の山の写しであり、山を中心とした集落を取り巻く世界観を、住居内の炉に凝縮して再現したものであろう。竪穴住居の主軸線を越えて、集落をとりまく周辺世界に向けて直線的な軸線が存在していたことを示している。山形の炉石をもつ住居は小形で、山を背景とすることから等高線の下方を出入口が向く配置となるのが特徴である。

神奈川県域では類例が未確認であるが、最近、房総半島の深名瀬島遺跡（南房総市）で類例が確認された。この遺跡では過去に40軒ほどが調査され、石囲炉、曾利系土器の比率が高く、黒曜石が多く出土し、多くが神津島産と推定されるなど、三浦半島を経由して中部高地の影響を強く受けた遺跡である。新たに発見された山形の炉石をもつ住居は、神奈備形の「お宮山」を背負っており、山との関係が注目される。このように深名瀬島遺跡では、土器とともに、住居や炉形態がセットで移動していることが考えられ、人の移動をとともう影響関係がうかがえる例である。また栃木、茨城県から福島県方面にかけて「曾利東北型」土器群の分布が知られ、相模を通じた曾利系土器の広がりが見られる。

#### 5 敷石住居と配石

稲荷木遺跡（秦野市）は、河川に面した大規模配石と敷石住居群で、傾斜面に集落が立地した典型例であろう。敷石住居は縄文時代中期末に出現し、後期にかけて発展するが、敷石住居出現を期に中期の集落とは様々な相違点が指摘できる。主な相違点としては、敷石住居は傾斜面に立地し、住居は帯状に分布することが多いこと、住居の主軸は斜面方向に向き、柱穴は壁柱穴配置となること、配石墓群が形成され、大規模配石に発展した例があること、等である。中期からの系譜を重視すると、奥壁側や出入口部の配石、および出入口部の小張出が発展して敷石形敷石住居が出現したとする山本暉久氏の説が最も有力であるが、柄鏡形敷石住居の成立に至る中間的な形態がなく、スムーズな形成過程が描けていない。

甲斐地域の初期の敷石住居は、3～4本の支柱穴をもつ小形円形の竪穴住居に敷石を敷設したものが知られる。桂野遺跡13号住、美通遺跡1号住が新地平編年12b古～新时期（加曾利E3中・曾利Ⅳa～曾利Ⅳb）、桂野遺跡3号竪穴、黒澤遺跡6号住、梅之木遺跡、宮の前遺跡1号住などが12b新时期（加曾利E3中、曾利Ⅳb）で、桂川流域～甲府盆地、八ヶ岳山麓方面に初期の例が分布し、それ

らは柄部をもたない敷石住居である。その後、12c期（加曾利E3新、曾利Va）に桂川流域の中谷遺跡などに柄鏡形敷石住居が登場し、続く13a期（加曾利E4古、曾利Vb）以降、甲府盆地一帯に柄鏡形敷石住居が普及する（図3・4）。このように甲斐地域では相模地域と異なり、柄鏡形と敷石は当初からセット関係にあったのではなかった。また敷石が小形住居で出現し、主軸が等高線下方を向く点は、先に紹介した山形の炉石をもつ住居と共通する。

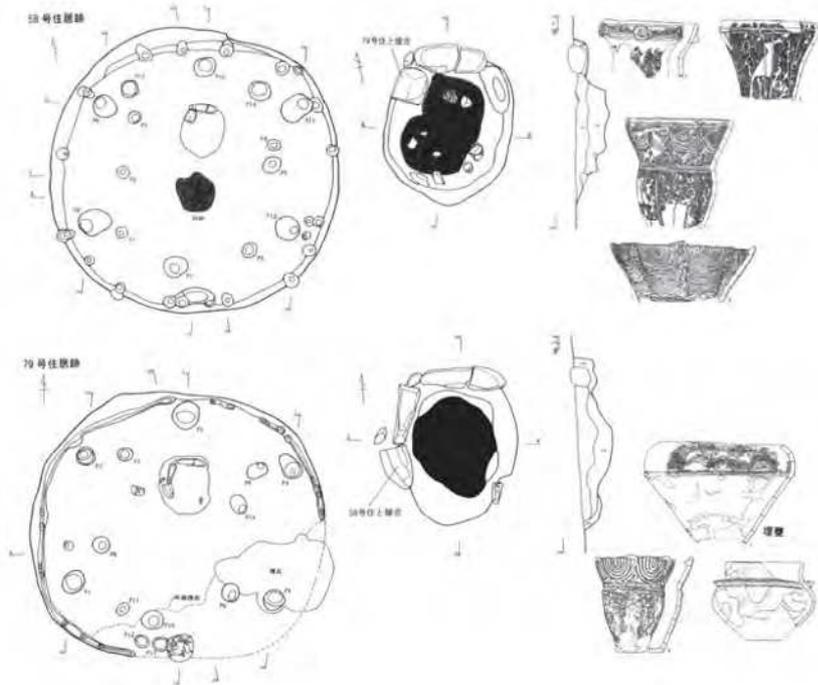
山形の炉石の出現を経て、後期の敷石住居が山を背にする点に関しては、後期になって山との関わりがより強くなったことを意味するのではないだろうか。この点に関しては、山中採集の縄文土器が参考になる。山梨県内では、山中から土器片が採集された事例として甲斐駒ヶ岳、鳥坂峠、釈迦ヶ岳等の例があり、縄文後期以降の時期とみられる（図5）。相模大山で加曾利B式土器が見つかるように、後期に山との結びつきがより明確化したことを示す例といえる。

甲斐では、晩期にかけて大規模配石をもつ遺跡があり、中でも金生遺跡は円形配石に板状立石や石棒を組合せたものである。八ヶ岳南麓は安山岩地帯であるが、板状立石は花崗岩の巨岩を用い、最短でも7km離れた釜無川の河原から運んだものである。傾斜面の南側、下方から配石を望むと、配石の背後に八ヶ岳が位置することから、立石は八ヶ岳の写しとして取り込まれたものと考えられ（図6）、山形の炉石に通じる意図、世界観をうかがうことができる。

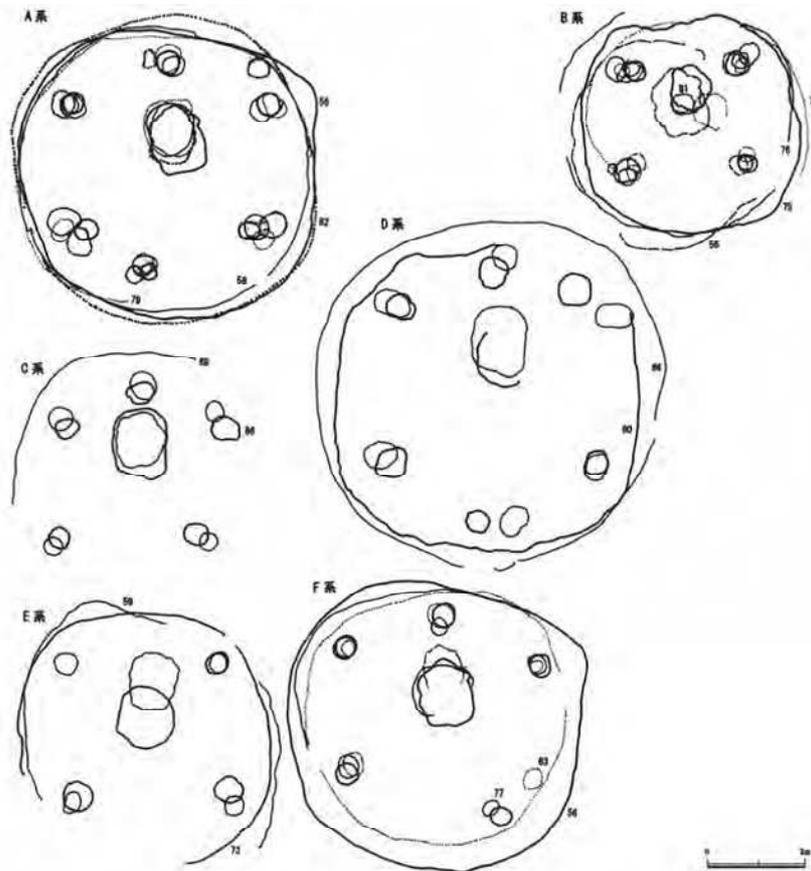
#### 【参考文献】

- 小畑弘己 2016『タネをまく縄文人 最新科学が覆す農耕の起源』歴史文化ライブラリー416  
櫛原功一 2016「住居型式と集落形成」『考古学の地平Ⅰ－縄文社会を集落から読み解く－』  
櫛原功一 2017「敷石住居の出現期の様相－甲信地域を中心に－」『国史学』第223号  
櫛原功一 2020a「竪穴住居と土器作りの場」『多摩考古』50  
櫛原功一 2020b「縄文人と山岳信仰－「山形の炉石」再考－」『山岳信仰と考古学Ⅲ』  
千葉大学文学部考古学研究室 2020『深名瀬島遺跡 第3次発掘調査概報』  
中山誠二 2020『マメと縄文人』ものが語る歴史40 同成社  
新津健 2020『大型配石と異形の土偶 金生遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」146 新泉社  
笛吹市教育委員会ほか 2015『前付遺跡・大祥寺遺跡』  
山梨県教育委員会 1989『金生遺跡Ⅱ（縄文時代編）』  
山梨県教育委員会ほか 1998『大月市御所遺跡』

なお、本書作成にあたり、北杜市教育委員会の佐野隆氏、村松佳幸氏より写真等の資料提供を受けた。記して感謝申し上げる次第である。

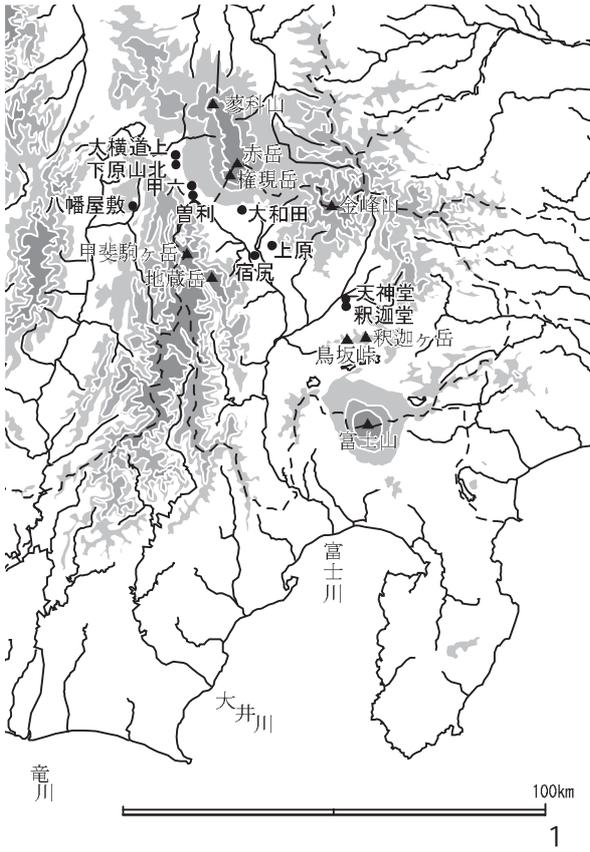


58号住と79号住（炉石が接合した住居）



住居型式の分類

図1 多摩ニュータウンNo.446B 遺跡の住居（櫛原 2016）



2



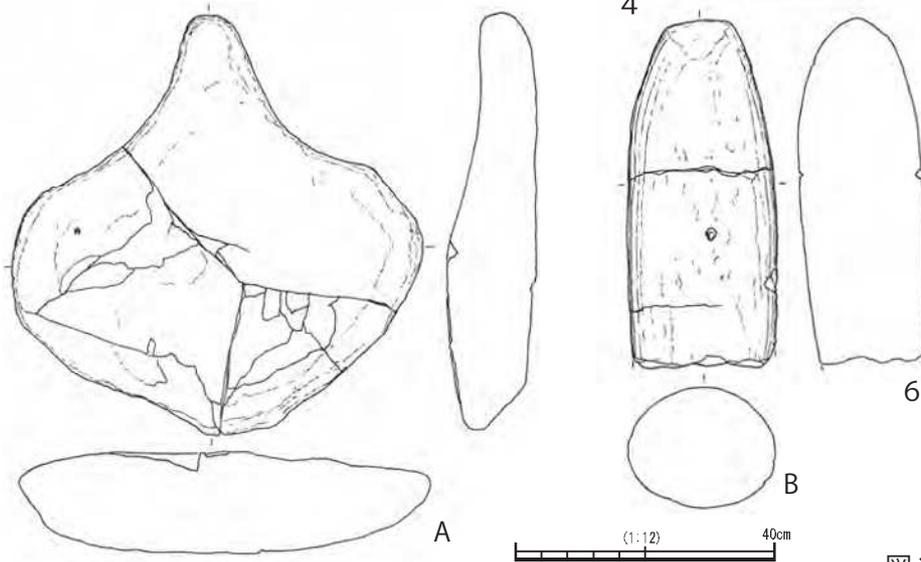
3



4



5



- 1 「山形の炉石」分布図
- 2 エボシ
- 3 上原 PJ152 炉
- 4・5 上原 PJ004
- 6 八幡屋敷遺跡 11号住の炉石  
(榎原 2020b)

図2 「山形の炉石」

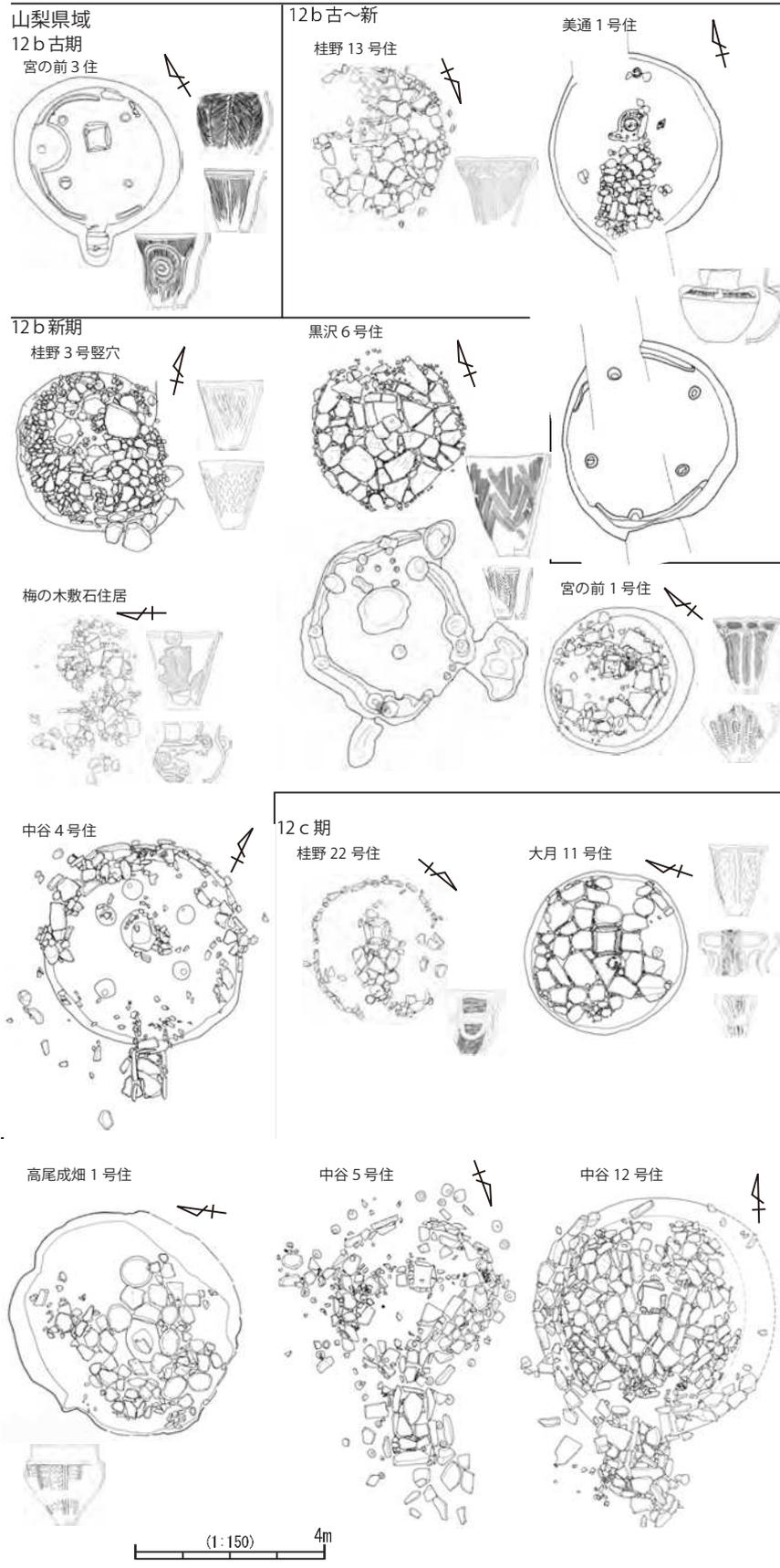


図3 山梨県域の敷石住居（櫛原 2017 を改変）

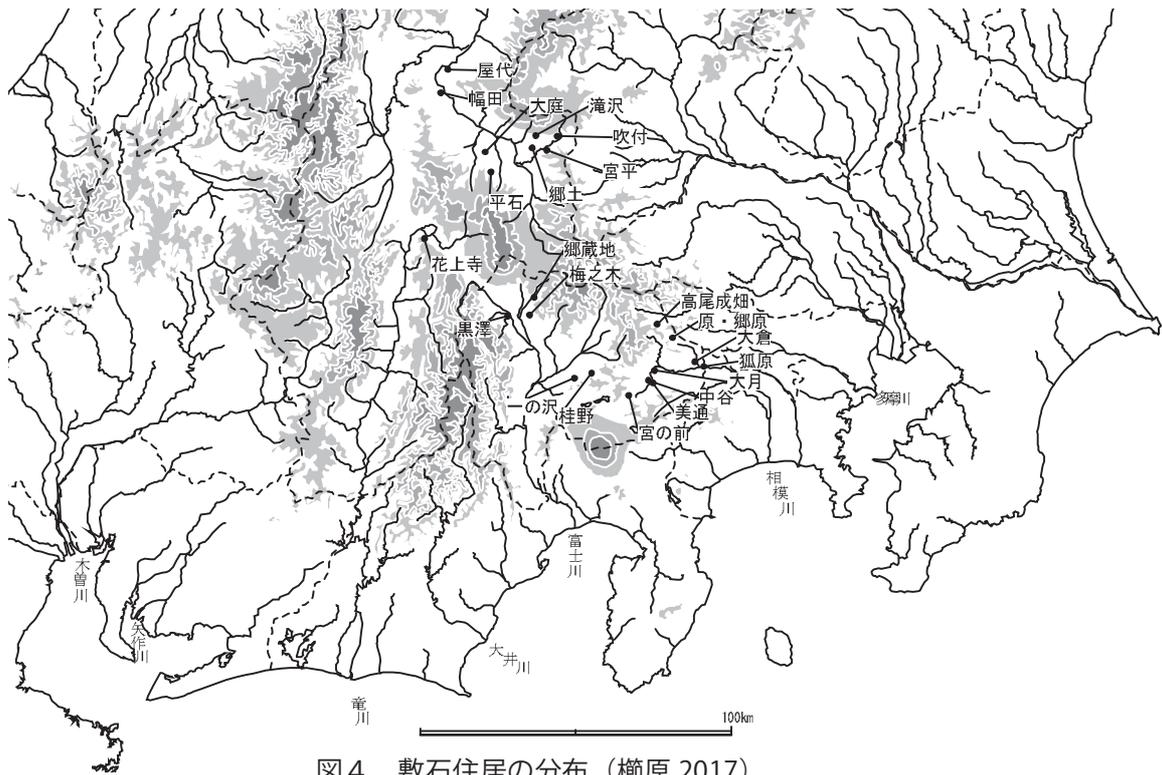


図4 敷石住居の分布 (櫛原 2017)

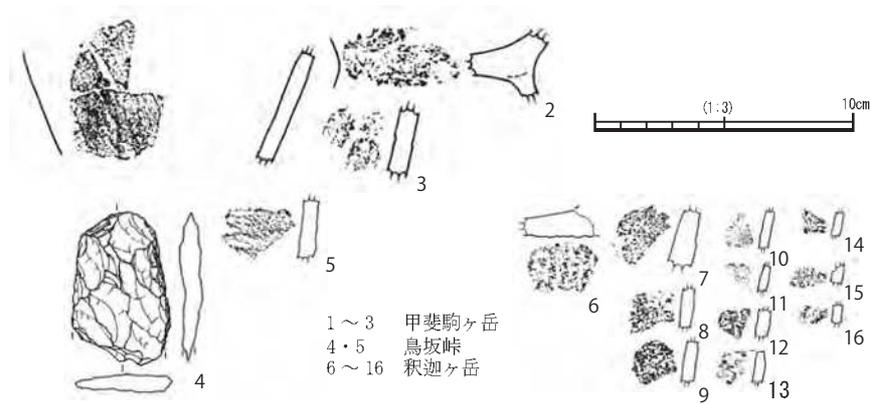


図5 山梨県内の山中で採集された遺物 (櫛原 2020 b)



図6 金生遺跡と八ヶ岳 (山梨県教委 1989)

## 駿河の弥生文化と相模

静岡大学人文社会科学部教授 篠原 和大

### はじめに

弥生時代は、日本列島にはじめて稲作を中心とする農耕文化が定着した時代だと考えられてきた。しかし、近年のレプリカ法などによる植物考古学を中心とする調査の成果は（中山 2010、小畑 2016 など）、その考えに少しずつ修正を迫りつつある。まず、縄文時代に遡ってマメ類の栽培が考えられるようになった。もう1点は弥生時代にコメ以外にアワ・キビの雑穀類がかなり利用されていることがわかってきた。私は、こうしたことが、日本列島の「稲作中心」の農耕文化観を大きく変えることにはならないと思うが、一方で、日本列島の多様な気候や地形環境に適応してきた弥生文化の開発戦略の多様性を説明するカギになるのではないかと考えている。

さて、相模のとなりの“くに”駿河では、戦後、登呂遺跡で初めて広い水田を営む農耕集落の姿が明らかになった。一方、相模では大塚・歳勝土遺跡の環濠集落、大規模な低地集落の中里遺跡など東日本の弥生文化のイメージを塗り替えるような発見が続いてきた。今、最新の考古学の研究成果をふまえながら、このとなりのくに同士の関係性を弥生時代の年代を追って（注1）考えてみるとまた意外な弥生文化の特質が見えてくるのではないだろうか。

### 1. 東日本農耕文化の黎明（Ⅰ～Ⅱ期）—中屋敷遺跡（大井町）と手越向山遺跡（静岡市）

【相模】足柄平野の周辺には山北町堂山遺跡、大井町中屋敷遺跡などの弥生時代前期に遡る遺跡が知られていた。中屋敷遺跡の2004年度の調査では、土坑から土器・石器とともに多量の炭化物が見つかり、一定量のコメ、アワ、少量のキビ、トチノキの炭化種実、獣骨などが検出された（昭和女子大学 2008）。この時期の小集団が小規模な畑作と稲作に従来型の狩猟採集を組み合わせることで農耕文化複合への変容をはかったこと（設楽 2005）を示している。

【駿河】駿河地域では、富士宮市渋沢遺跡、富士市山王遺跡、静岡市清水天王山遺跡などで、やはり小集団をなすとみられる弥生前期の様相が知られている。中期前葉（Ⅱ期）には静岡・清水平野西部の丸子地区で丘陵上の遺跡で大型の打製石斧（石鋏）を伴うことが知られていた。丸子地区の手越向山遺跡では、Ⅳ期の方形周溝墓の下層からⅡ期とみられる畠状遺構を検出した（静岡大学考古学研究室 2011、図1）。畑の作土とみられる土層とその下部の耕作痕とみられるもので、アワなどを栽培した畑の可能性がある。レプリカ法による土器圧痕調査の結果では、この時期にアワ・キビとコメが検出されるようになる（篠原ほか 2012）。

※Ⅰ～Ⅱ期、相模・駿河ともに平野周縁から丘陵部で小集団が縄文時代以来の生業に農耕を組み合わせた農耕文化複合をなす生業を展開する。そうした東日本の様相の具体的な証拠が得られている。

## 2. 本格的な農耕集落の形成（Ⅲ期）—中里遺跡（小田原市）と有東遺跡（静岡市）

【相模】小田原市中里遺跡は、小田原平野の酒匂川がつくる三角州の末端付近に位置する弥生中期中頃（Ⅲ期）に形成された大規模なムラ。100棟近くの竪穴住居跡と多くの掘立柱建物・土坑などが見つかり、近接して多くの方形周溝墓からなる墓地の一部も見つかった。木製農具やそれを加工する大陸系の磨製石斧類があり、水田稲作を本格的に行っていたと考えられる。近畿系土器の出土も注目される。Ⅱ期の小集落はこれ以前に姿を消し、Ⅲ期に周辺から集まった集団と先進技術を持つ外来集団とが協力して本格的な農耕集落を形成したのではないかと考えられている（設楽前掲）。

【駿河】静岡清水平野では、「登呂ムラの母ムラ」として知られる有東遺跡がこの時期（Ⅲ期）に集落を形成する。当初から比較的規模の大きい集落だったようで居住域の周囲には方形周溝墓からなる墓域も形成される。集落の形成期とみられる土器廃棄土坑（16次調査S K05）からは、在地の甕形土器のほかに東海西部（尾張・三河、遠江）の伝統を引く壺、中里遺跡でも出土する関東地方の伝統を引く壺などが一緒に出土している（図2）。この地域での本格的な農耕の開始にあたって、地域の伝統的な集団に東西の遠方も含む他集団が加わって開発が行われたことが想起される。

※Ⅲ期には相模、駿河ともに沖積地に規模の大きい集落が認められ、各地から人や技術の移動があって本格的な農耕集落・社会が形成される動きがあった。

## 3. 環濠を持つムラと持たないムラ（Ⅳ期）—有東遺跡（静岡市）と大塚・歳勝土遺跡（横浜市）

【駿河】Ⅲ期に形成された有東遺跡は、Ⅳ期に継続してさらに大きな集落になった。墓域はさらに拡大し、隣接する鷹ノ道遺跡にも方形周溝墓が作られるようになる。集落内では大量の未製品を含む磨製石器類が見つかり、水辺近くでは木製農具の未製品を水漬けした穴が見つかっている。石器と木器の加工生産が集約的に行われ、それらの道具が投入されて耕地の開発・管理が行われた。そのことがムラを大きくしたようである。ただし、Ⅲ～Ⅳ期の間には有東の周辺には小集落はつくられなかった。静岡・清水平野には有東のようなⅣ期の規模の大きい集落が5つほど認められるが、いずれも環濠を持たない集落で周辺には目立った集落は認められない（篠原 2019、図3左）。

【相模】Ⅲ期に形成された中里遺跡はⅣ期までは集落は継続せずに終焉を迎える。相模地域のⅣ期は、鶴見川・早淵川流域の著名な大塚・歳勝土遺跡や折本西原遺跡などの環濠集落が多く作られた時期である。これらの環濠集落はⅣ期に突如として出現し、その後環濠を持たない集落が多数出現するが、折本西原遺跡のようにその段階に継続するものもあれば、大塚遺跡のようにそれ以前に終焉を迎えるものもある。また、Ⅴ期を迎える頃には大半の集落が無人化し、この地域から集落がなくなるような大きな変化があった。それぞれの環濠集落は方形周溝墓からなる墓域を持っており、突出した折本西原集落を中心とした地域社会があったと考えられている（安藤 2003）。

※Ⅳ期に駿河と相模の動向は大きく分かれることになる。ただし、相模のⅣ期宮ノ台式土器の起源は遠江・白岩式土器が考えられているし、駿河東部の動向との関係も考えられる。

## 4. 登呂の時代と東海から南関東への人の移動（Ⅴ期）

【駿河】著名な登呂遺跡の集落と広大な水田は、弥生後期（Ⅴ期）の始めに一気に拓かれた。母ム

ラの有東遺跡はこの時期に縮小し、鷹ノ道遺跡などに集落が形成されるので、やはり有東の集団が分かれて集落を形成し、広い範囲の水田を開発経営するようになったのだろう。この背後には鉄製工具の普及が考えられる。石器は激減し、木製農具の生産効率も上がったため労働の分散が可能になり、集落が増加し、広域の水田が広がった。こうして広がった集落間には農業共同体的な結合が考えられ、静岡清水平野ではそうしたいくつかの集団関係が認められる（篠原前掲、図3右）。

【相模】弥生後期（V期）に、南関東地方では、東京湾岸から房総半島南部にかけて久ヶ原式土器の分布圏が形成される。相模地域の東京湾岸および三浦半島は久ヶ原式土器の分布圏となるが、相模湾岸の後期初頭は遺跡の分布が希薄となり、その後、静岡県東遠江地域を故地とする菊川式土器や西遠江地域から愛知県東三河地域を故地とする伊場式土器・寄道式土器を出土する環濠集落が作られる。相模川東岸域には綾瀬市神崎遺跡、蛭名市本郷遺跡など寄道式系の集団が、西岸域の平塚市王子の台遺跡、真田・北金目遺跡群などでは菊川式系の集団が移住したと考えられる土器の移動現象がある（図4）。このような移動は、後期中頃から後半まで継続したようだ。

※V期に駿河の静岡清水平野では、登呂など集落が分散化して一気に開発が進む。一方、相模など南関東地方では、東海地方からの移住などもあって、それまで集落が希薄であった地域にも開発が進んでいった。両者の間には地形環境への適応や資源利用においても戦略に違いがあるようだ。

## まとめ

相模ととなりのくに駿河の弥生文化を比較していくと、当初は小規模な農耕文化複合的な社会から本格的な農耕集落形成にいたった社会が、弥生中期後半あたりから環境への適応や開発戦略において異なったあり方を示すことがわかる。沖積地に固執して水田開発を進める静岡清水平野と環濠集落を形成して丘陵縁辺にも開発を広げる相模の一部は対照的でもある。それぞれ、日本列島の様々な環境に適応していった農耕社会のあり方を示しており、後期頃に形成されていく地域的な農業共同体的な社会は、後の政治的な地域社会の単位にもなっていくようだ。

【註】 弥生時代は前期（I期）、中期（II～IV期）、後期（V期）に時期区分され、炭素較正年代でそれぞれの始まりはI期 B. C. 8世紀頃、中期 B. C. 4世紀頃、後期 A. D. 1世紀頃の年代観がある。

【参考文献】 安藤広道 2003「弥生時代集落群の地域単位とその構造」『考古学研究』50-1／小畑弘己 2016『タネをまく縄文人』／静岡大学人文学部考古学研究室 2011『手越向山遺跡の研究』／設楽博己 2005「東日本農耕文化の形成と北方文化」『稲作伝来 先史日本を復元する4』／篠原和大・真鍋一生・中山誠二 2012「植物資料から見た静岡清水平野における農耕の定着過程」『静岡県考古学研究』43／篠原和大 2019「農耕文化の形成と登呂遺跡」『大学的静岡ガイド』／昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 2008『神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡発掘調査報告書』／中山誠二 2010『植物考古学と日本の農耕の起源』



図1 静岡市手越向山遺跡の畠状遺構（Ⅱ期）（左：南西から遠景、右：畠状遺構完掘状況）

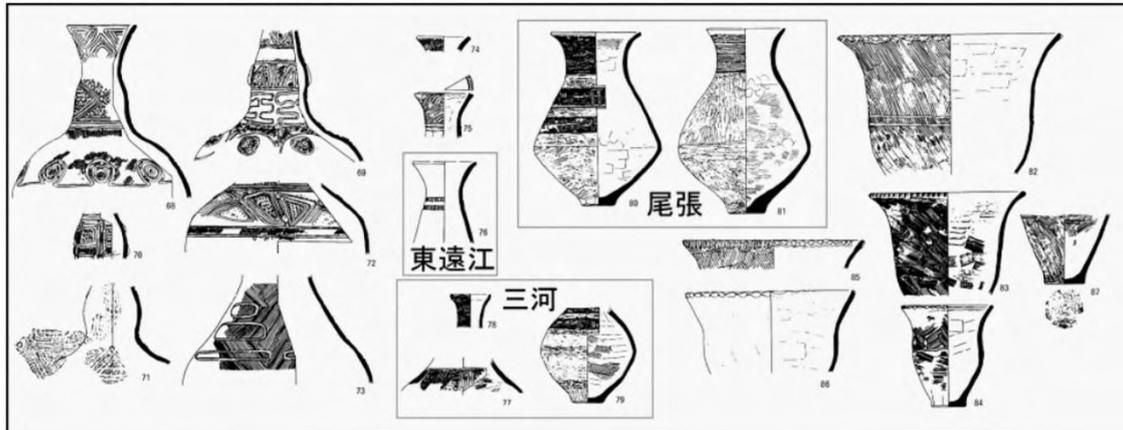


図2 静岡市有東遺跡第16次調査SK05出土土器（Ⅲ期）

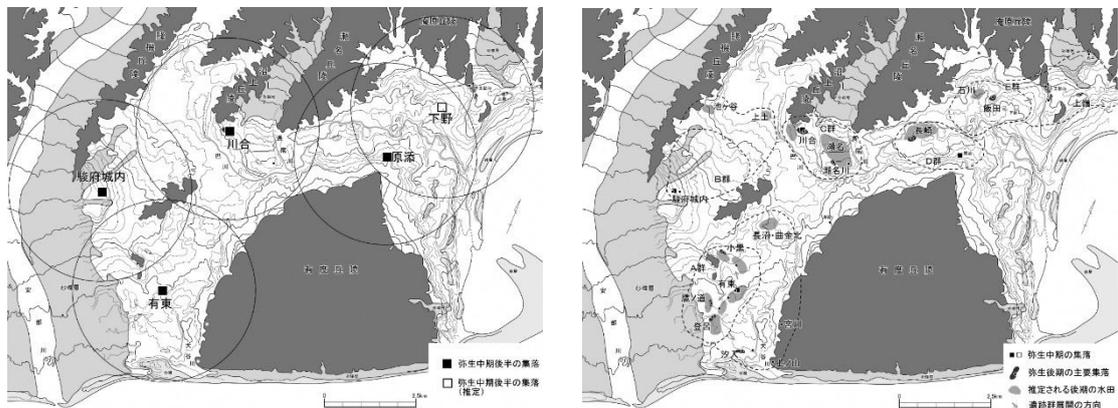


図3 静岡清水平野の弥生遺跡の展開（左：Ⅳ期、右：Ⅴ期）

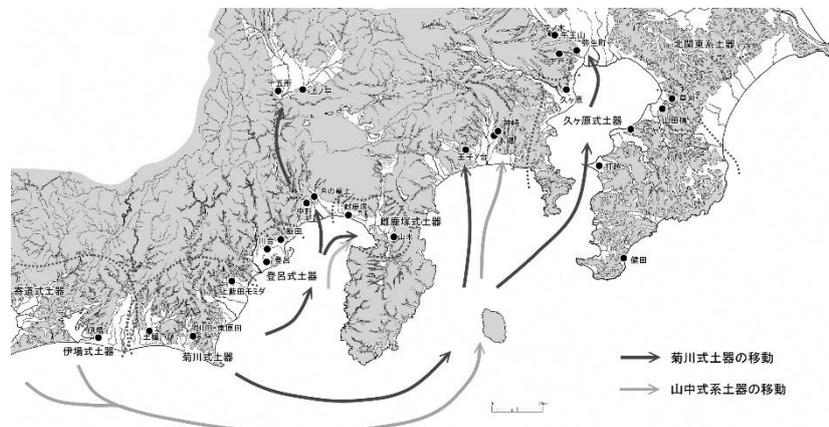


図4 東海～南関東地域の弥生後期（Ⅴ期）の土器の移動

## 古代の武蔵と相模

### — 国分寺造営と国堺周辺の遺跡から考える —

国分寺市教育委員会ふるさと文化財課 依田 亮一

#### はじめに

群馬県の古墳研究で名高い尾崎喜左雄は、かつて「関東地方の古代の国名をみると、たとえば相模・武蔵両国は、「むさかみ」「むさしも」から前者では「む」、後者では「も」が脱落したものと考えられる。もとは「むさ」であったろう」と述べ、『宋書倭国伝』武の上表文「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平らぐることに九十九国」の五十五国には、けぬ・ひた・ふさ・むさ、というクニが含まれていることを示唆した（尾崎 1970）。また、大化前代に現在の相模川流域一帯を統治した相模国造は、『国造本紀』に「志賀高穴穂朝、武刺国造祖神伊勢都彦命三世孫弟武彦命定\_賜国造\_」と記され、武蔵国造と同祖関係にあたることに加えて、古墳分布や埋葬形態の構造・特徴が相模と武蔵の国堺で分断されない様相が認められるなど（柏木 2015）、両国は文化的に一体性をもった地域と捉えられることがあるが、その実相について幾つかの考古・文献資料から考えてみたい。

#### 1. 武蔵国の所属替え

大化の改新後、ほどなく中央政府は東国へ国司を派遣して、それまで国造が治めていた在地の状況を把握するために、戸籍の作成や校田、武器、貢納物、国造や評司（郡司）候補者等の調査を行った。相模・武蔵国は、『日本書紀』の天武四年（675）十月十八日条「相模國言、高倉郡女人生三男」、同十三年（684）五月十四日条「化来百濟僧尼及俗人男女并廿三人、皆安置于武蔵國」とあるのが史料上の初見で、すでに7世紀後半に「サガミ」・「ムサシ」と呼ばれる領域が成立していたが、同十二～十四年（683～5）に伊勢王等を遣わして諸国の国堺が定まると、全国は約60の国々に分かれ、あわせて東山・東海・北陸・山陽・山陰・南海・西海の七道からなる広域行政区分も施行された。その際、『出雲国風土記』に「国の大体は震を首とし、坤を尾とす。東と南とは山にして、西と北とは海に属く」と国域を明記しているように、国の境界は山野河海といったランドマークを目印にすることが通例であった。これによって相模国は「東海道」、武蔵国は「東山道」諸国に編入され、都と地方の正式な往来には、それぞれに通過する官道を利用していたが、奈良時代半ば以降になると両国を行き交う人々の実態を反映して国の所属替えが行われた。

- ① 神護景雲二年（768）三月一日 これより先に、東海道巡察使・式部大輔・従五位下紀朝臣広名らが次のように言上した（中略）下総国の井上・浮嶋・河曲の三駅と武蔵国の乗瀧・豊嶋の二駅は、東海・東山両道につながる駅なので、行使の送迎など頻繁であります。どうか中路（山陽道が大路。東海・東山が中路。その他は小路）に準じて馬十匹を置かれることを希望します。太政官で審議し奏上したところ、奏に依れとの勅があった。その他の諸道の春米と諸国の運送人への食料支給も、東海道に準じて施行させた。

- ② 宝亀二年(771)十月二十七日 太政官が次のように奏上した。武蔵国は元来東山道に属していますが、兼ねて、東海道にも通じております。それ故行使の往来が頻繁で、十分な世話をすることができません。その東山道の駅路は上野国の新田駅より下野国の足利駅まで達してしまして、この道路は便利な道であります。しかし、現状では、道を枉げて上野国邑楽郡より五つの駅を経て、武蔵国の国府に到り、用事が終わって退去する日には、また同じ道を通して、上野国を経てそれから下野国へ向かっています。今の東海道は、相模國の夷參駅(座間)より下総國の国府に達してしまして、その間には四駅があり、往来するのに近くて便利でもあります。しかし、この便利な道をやめてあの道を探りますと(上野国府から武蔵国府を往復して、下野国府に向かう経路)、損害が極めて多くなります。私どもが考えますに、武蔵国を改めて東山道から東海道に属させれば、公私ともに都合がよくなり、人馬も休息することができるでしょう。天皇は奏上どおり、これを許可した。
- (※ ①・②ともに宇治谷孟 1992・95『続日本紀(中・下)』講談社学術文庫より引用。)

こうして宝亀二年以降に武蔵国は東海道に組み込まれるが、国内の住人らが詠んだ万葉集東歌の中には、すでに相模国を通して(=東海道を使って)西国へ赴任する防人達の様子が描かれている。

「赤駒を山野にはかし捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ」 豊島郡上丁椋椅部荒虫が妻宇遲部黒女  
(巻 20-4417)

「わが行きの息衝くしかば足柄の峰延は雲を見とと偲はね」 都築郡上丁服部於田 (巻 20-4421)

「わが背なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かななあやにかも寝る」 妻服部皆女 (巻 20-4422)

## 2. 揺れ動く相模と武蔵の国堺

江戸時代の国絵図や地誌類等を手掛かりとして相武国堺を俯瞰すると、その北西側では、城山湖の北方(相模原市緑区川尻字雨降)に端を発し、藤沢市片瀬江の島付近で相模湾へ注ぐ「境川」の上～中流域に沿い、その範囲は現在の神奈川・東京都県境に踏襲されている。一方の南東側は、境川左岸を上がり、東名横浜町田インターチェンジ付近から丘陵の尾根伝いに、横浜の中心市街へ注ぐ帷子川・大岡川水系と柏尾川水系(境川の支流)の分水嶺を辿って、金沢区六浦と横須賀市追浜間の低地を東西に横断しながら東京湾へ通じる。境川は都県境や相武の国堺に起因した名称だが、『新編相模国風土記稿』によると、古くは「高座川」・「田倉川」と呼ばれ、川を挟んで両岸に鶴間・小山・相原といった同名地名が分布する詳細な経緯や年代は不明だとしている(史料九)。

このうち「鶴間」は古代史料には現れず、源頼朝が富士の鷹狩りの帰路で遭遇した鶴の舞う姿に因むと伝承される地名で、永禄二年(1559)の奥書をもつ『北条氏所領役帳』では、左岸の多摩郡鶴間村(町田市)、右岸の高座郡上鶴間村(相模原市)・下鶴間村(大和市)の原型となる村々がそれぞれ存在した(史料七)。また、遡って元弘三年(1333)～建武二年(1335)頃の足利尊氏・同直義所領目録には「相模国紘間郷」、長享三年(1489)の足利政氏加判洪垂小四郎本知行目録に「武州小山田保鶴間郷内小河村并心廣寺田畑在家」(ともに町市内)とあり、相模・武蔵双方に帰属していた様子がわかる(史料五・六)。それは鶴間の南に接する「瀬谷」も同様で、元弘三年の鎌倉攻めの折、石川義光が新田義貞へ軍功を上申した際の軍忠状に「相模国世谷原」に馳せ参じたことが、そして本来は正中二年(1325)に鑄造された武州恩田萬年寺の梵鐘で、同寺が廃寺となった後、深見を治める山田伊賀守入道が寶徳四年(1452)に瀬谷の妙光寺へ寄進した梵鐘(県指定文化財)の追刻文に「相州瀬谷郷」と記されるのに対し(史料一・三)、慶永二十三年(1416)に室町幕府4代将軍足利義持の弟義嗣らと謀り、鎌倉公方の足利持氏に反旗を翻した上杉禅秀の乱では、石川幹國

の軍忠状や争乱の詳細を記した『鎌倉大草紙』に「武州瀬谷原（世谷原）」の表記があるなど、中世に付近一帯は相武国堺が非常に曖昧であったことを暗示している（史料二・四）。

さて、高座川を国堺と定めて名称を境川に変更したのは、徳川家康が関東移封後の文禄三年（1594）に行った検地が契機で、それ以前は北方に連なる嶺頭であったといわれる（神崎 1967・河野 1996、史料八・九・十一）。その嶺とは高尾山麓から町田市域を東西に走り、標高は高い所で約 200～220 mを有する多摩丘陵を指し、その先は三浦半島を南北に縦断する三浦丘陵へ連なるが、ともに約 100 万年前の前期更新世に形成された砂泥互層の海成層（上総層群）を基盤とする地形である。中世・近世の国堺がそのまま古代に遡るか否かは不明だが、当該地付近の遺跡の様相を次にみてみたい。

### 3. 相武両国分寺の造営と国堺周辺の遺跡を探る

奈良時代に政権中枢を担った藤原四兄弟が天然痘の流行で相次いで死去し、一族の広嗣が九州の太宰府で反乱を起こすなど不安定化した社会情勢を仏教の力で鎮めようと、天平十三年（741）に聖武天皇は全国に国分寺建立の詔を發布した。当初は諸国の正税から四万束を割き、国分寺の料稲として造営費に充てたものの建設は思うように進まず、同十九年に国司へ督促して郡司層の寄進や協力を仰いだが、天平勝寶八（756）年には聖武天皇一周忌齋会までに終えるよう、再度命じるほど造営工事は難航した。詔の發布から15～20年もの歳月を費やした結果、相模国分寺は高座郡（海老名市）、武蔵国分寺は多磨郡（国分寺市）にそれぞれ建てられることになった。

武蔵国分寺では、国内21郡中新羅郡を除く20郡の郡名を冠した文字瓦が出土することから、国を挙げて造寺活動に取り組み、新羅郡が誕生した天平宝字二年（758）までには造営が完了したと想定されている。また、国華である七重塔からは橘樹郡の郡名瓦が最も多く出土し、都築郡（立野郷）、久良岐郡（大井・諸岡・鮎浦郷）といった南武蔵の各地域も造営に深く関与しているが、塔跡出土軒先瓦の文様意匠は上植木廃寺（伊勢崎市）や上野国分寺（前橋市）の影響がみられ、初期は東山道武蔵路を介して上野国との繋がりが強かったことが窺える。また、武蔵国分寺は主軸を揃えて南北に講堂・金堂・中門が一行で並び、これらと鐘楼・経蔵・僧坊を築地塀や溝で圍繞した中枢部から約200m東に離れて七重塔が聳える独特の伽藍であるのに対して、相模国分寺は下総国と同様、西に塔、東に金堂を配し、南面する中門と北の講堂を回廊で結ぶ、七世紀後半の地方寺院に多い法隆寺式伽藍配置を採用するなど、それぞれの地域の造寺意識が反映されて出来た国分寺であった。

その後、平安時代以降には東国を襲った災害記事が六国史上に散見される。弘仁九年（818）年七月に「相模・武蔵・下総・常陸・上野・下野等の国、地震す。山崩れ、谷埋まること数里、圧死する百姓勝て計う可からず」、翌年二月と八月に「相模国金光明寺、災す」・「遠江・相模・飛騨三国の国分寺、災す」とあり（以上『類聚国史』）、承和十二年（845）には「武蔵国言。国分寺七層塔一基、去る承和二年を以て、神火の焼く所となる」（『続日本後紀』）、元慶二年（876）九月二十九日に「夜、地震す。是日、関東諸国の地、大いに震い裂ける。相模、武蔵、特に尤も甚し」（『日本三代実録』）など幾多の災害で両国分寺は甚大な被害を被ったが、その都度、復興・再建が果たされている。

創建期の瓦窯は、相模では乗越瓦窯・からさわ瓦窯、武蔵では南多摩窯大丸地区・南比企窯が主たる生産地であったが、再建期には各々瓦尾根瓦窯・東金子窯、そして最終的な補修段階では両国

ともに南多摩窯の御殿山地区へと窯場が移動する。このうち、南多摩窯は相模国堺に営まれた窯場で、八王子市～町田市域に広がる御殿山地区では多くの須恵器が生産され、最盛期を迎える9世紀末～10世紀前葉には武蔵国南部・相模国全域はもとより、甲斐国の一部にも製品は流通している。また瓦尾根地区では嶺頭以北の瓦尾根瓦窯は相模国分寺に、嶺頭以南のセイカクボ瓦窯・多摩ニュータウンNo.944瓦窯は武蔵国分寺に瓦を供給するなど、尾根を超えた製品流通の実態が確認されている。さらに、令制下の国々では、それぞれ独自の技法と胎土を用いて土師器を製作し、考古学上の分類用語で相模型・武蔵型・甲斐型などと呼称されるが、国堺付近の遺跡からは隣接する国の土師器が混合して出土することが多く、地域によっては二つの文化圏の折衷型ともいえる独自の土師器（武相型）も製作された。こうした遺物の出土様相をつぶさに観察することによって、両国を行き交う人々の生活の一端が垣間見えてくる可能性がある。

## おわりに

平安時代に入ると国を越境する人々の移動や山野の開発が活発化し、各地では国境をめぐる争論が生じた。『日本後紀』延暦十六年（796）には、現在の山梨県上野原市付近で所管国をめぐる相模と甲斐が争い、「□（都）留村」東辺の「砥沢」を国堺と定めて決着をみたが、背景には木製食器（漆器）の需要が高まったことによる豊富な森林資源の獲得が要因と想定されている（田中 2017）。その一方で、甲斐に比べて地形的障害が少ない武蔵と相模では、史料の上から争論した形跡はなく、南多摩窯の製品流通の実態からは、丘陵地が開発が相互協力によって進められたかのような様相を示しており、その原動力として両国に多い渡来系集団が丘陵地を挟んで居住していたことを指摘する意見もあるが（服部 1995）、相模国堺全体を俯瞰しても同様の傾向が認められるのか、地域によって状況が異なるのか、今後検証していく必要があると思われる。

## 【主要参考文献】

- 尾崎喜左雄 1970 「毛野の国」 杉原荘介・竹内理三編『古代の日本 7 関東』角川書店  
柏木善治 2015 「境界のことー古代における旧相模国と武蔵国界を参考に境界の可変性をみるー」  
『神奈川考古』第 51 号  
加藤隆志ほか 2006 『境川流域民俗調査報告書』町田市立博物館・相模原市立博物館  
神崎彰利 1967 「第一章 近世前期の相模原 第二節 検地の施行と村落の構造」  
『相模原市史 第二巻』相模原市役所  
木下 良・木本雅康・中村太一・荒井秀規 1995 『神奈川の古代道』  
藤沢市教育委員会博物館建設準備担当  
河野喜映 1996 「多摩丘陵南側の武蔵と相模の国界について」『多摩考古』26 多摩考古学会  
田中広明 2017 「古代の国境論争」  
市澤英利・荒井秀規編『古代東国の考古学 4 古代の坂と堺』高志書院  
服部敬史 1995 「窯業生産からみた多摩丘陵の開発」『月刊歴史手帖』第 23 巻 10 号 名著出版  
※この他、最近刊行された関連書籍として、下記の文献は示唆に富む内容が盛り込まれている。  
あわせて参照されたい。  
鈴木靖民 2014 『相模の古代史』高志書院  
川尻秋生 2017 『古代の東国 2 坂東の成立 奈良・平安時代』吉川弘文館  
荒井秀規 2017 『古代の東国 3 覚醒する<関東> 平安時代』吉川弘文館 など

【史料一】

164 石川義光軍忠狀并 新田義貞證判 〔石川文書〕

陸奥國石河七郎□義光謹言上

早給御舉□□□□事

右者、五月十七日元弘馳參相模國世野原、同十八日稻村崎、致散々合戦之時、被討右膝舉、同時合戦之間、藤田左近五郎、同又四郎、見知畢、同廿一日□者、於前濱致忠節之條、岡部又四郎、藤田十郎三郎、又以見知畢、然早給御判、爲浴恩賞、恐々言上如件

元弘三年十月 日

一見了(新田義貞)  
(花押)

〔出典 『宮城縣史30(資料編7)』〕

【史料二】

妻〇石川幹國軍忠狀寫〇石川氏文書

著到

石川五郎基國軍忠事(登)

右、依右衛門佐入道禪秀陰謀、去九日、於武州瀨谷原、屬完戶備前守手、至于同十日雪下御合戦、致涯分忠節上者、賜御證判、爲備向後龜鏡、恐々言上如件、

應永廿四年正月 日

〔承了、(花押)〕

〔出典 『神奈川県史 資料編3 古代・中世(3上)』〕

三三六 萬年寺鐘銘 〇横濱市妙光寺所蔵

(池ノ間跡(第一区) 武州志田靈鷲山松栢万年禪寺者、(郡築形))

行基菩薩草創、涉歲時也久矣、招提既爲

大士之建剎、寺基又爲勝槩之靈區、茲者、

住山道周、檀那廣鑑、共悲虛無器、日夕驅馳、遂造巨鐘、可以驚寤寐、可以齊動

止、非唯迎蟾送鳥之模範、亦乃洗心

息苦之号令也、即耳處而證口通、是

殊爲最素願應時、既成持報德、豈可

得而說乎、爲之銘曰、

形器斯立 中虛外円 聲塵遠到

遙聞九泉 息彼輪苦 成此大緣

宣明破晦 勸誦勸禪 檀信景仰

寺内安然 佛日赫々 王道平平

于時正中貳年丑三月十七日

万年禪寺住持比丘道周謹題

大檀那菩薩戒弟子廣鑑

(第一区) 大工物部守光

(追類(第四區) 南贍浮州大日本國中

(高橋郡) 相州瀨谷郷住藤原

朝臣山田伊賀入道

經光、雖執倍々利潤、

質本主依置流之、爲

大檀那奉寄進妙光寺矣、

于時寶徳四年申卯月十六日

大工和泉守恒國

〇「鎌倉の古鐘」・坪井良平氏「日本古鐘銘集成」



神奈川県指定有形文化財 工芸品 妙光寺銅鐘  
〔〔横濱市瀨谷区上瀬谷町〕1969年12月2日指定〕

【史料三】

〔出典 『神奈川県史 資料編2 古代・中世(2)』〕

【史料四】 鎌倉大草紙 (抜粹)

越後をさして落ゆく。公方は瀨名迄落させ給ふ。去程に新御堂殿并持仲。鎌倉に御座まし。關東の公方と仰られたまふ。しかれども近國猶持氏の味方にて召に不應。さらば討手をつかはすべしとて。持仲を大將軍として中務大輔憲顯。其弟伊與守憲方。武州へ發向す。憲顯はいたはる事ありて留り。豫州を大將軍として十一月廿一日小机邊迄出張す。持氏御方には江戸。豊嶋。二階堂下野守。并南一揆。并穴戸備前守兵ども。入間川に馳集り陣をとる。伊與守持仲御供申入間川〔に〕發向す。其道にて同廿三世谷原にて合戦を初。終日戦くらしける。伊豫守打負鎌倉を引返す。江戸豊嶋勝にのり追懸しかば。伊豫守も持仲も漸同廿五日夜に入鎌倉へ歸り給ふ。又上野國にては

※中略※

去程に「禪秀は千葉。小山。佐竹。長瀬。三浦。声名の兵三百餘騎を足柄山越入江の庄の北の山の下に陣を取る間。持氏は今川勢を先登として入江山の西に陣を取給ふ。今川勢夜討して禪秀敗軍箱根水呑に陣を取」。今川勢三嶋に陣をとり。先陣は葛山。同荒河治部大輔。大森式部大輔。今川門族瀨名陸奥守。足柄を越て曾我中村を攻めとし。小田原に陣を取。朝比奈。三浦。北條。小鹿。箱根山をこえ。伊豆山衆徒と并土肥。土屋。中村。岡崎を攻めとし。同小田原國府津前川に陣を取。明れば應永廿四年正月一日鎌倉より滿隆御所并禪秀。武州世谷原に陣を取。南一揆并江戸豊嶋と合戦しけるが。江戸豊嶋打負て引退きけり。然といへども上方の討手小田原まで責下り。味方打負るよし聞ければ。敵は負ても悦び。味方は次第に力をおとし。同九日味方大形心替りして敵に加りしかば。持仲。滿隆。禪秀不叶。其夜鎌倉へ没落なされ。

〔出典 『群書類従・第二十輯 合戦部』〕

【史料五】

三四 足利尊氏・同直義所領目録 ○比志 島文書

足利殿

〔伊勢〕國柳御厨〔北條〕 尾張國玉江庄〔大佛〕 遠江國池田庄〔北條〕 泰家跡

駿河國泉庄同 同國佐野庄〔大佛〕 貞直

伊豆國宇久須郷同 相摸國糟屋庄〔大佛〕 同國田村郷同

同國治須郷〔沼津〕同 武藏久良郡 同國足立郡〔大佛〕 泰家

同國麻生郷〔三浦〕時顯 三河國重原庄〔大佛〕 貞直 小山邊庄〔赤橋〕 守時

同二宮庄 常陸國田中庄〔大佛〕 泰家 同國北郡大方〔大佛〕 禪尼

近江國池田庄 同國岸下御厨〔大佛〕 泰家 信乃國小泉庄

奥州外濱同 同國糠部郡同 上田庄同

佐渡國六斗郷同 筑前國同 豐前國門司〔大佛〕 關同

肥後國健軍社 日向國富庄同 同嶋津庄〔大佛〕 守時

左馬頭殿〔足利直義〕 同國懷嶋〔高座郡〕同 伊豆奈古谷〔大佛〕 □

相摸國絃間郷〔高座郡〕貞直 常陸國那珂河東〔大佛〕 貞直 遠江國谷和郷同

武藏國赤塚 同國下西郷 伊與國久米良郷同

同國宇狩郷同 備後國高野 播磨國垂水郷

近江國廣瀬庄〔大佛〕貞直 備後國羽持郡同 同國吉岡同跡

備後國城山

○本文書は年次未詳。元弘三年より建武二年に至る間のもと思われる。

〔出典〕『神奈川県史 資料編3 古代・中世（3上）』

【史料六】

三六 足利政氏加判澀垂小四郎本知行目録寫 ○清音 寺文書

澀垂

澀垂下野小四郎申本知行分

一 武州高麗郡廣瀬郷内大谷澤村

一 同國大寄郷内蘆荻庭村

一 同國足立郡大宮郷内吉野村

一 同國小山田保鶴間郷内小河村并心廣寺田島在家

一 下野國足利庄澀垂郷内佐野給

一 同國三河郡内上名間井村

一 相州八幡庄内北原郷

一 同國三浦郡内久野谷郷内猿江村并柏原在家

右、永享亂刻、被致強入部地也、若偽申候者、八幡大菩薩可有照覽候也、

長享三年四月廿五日

〔出典〕『神奈川県史 資料編3 古代・中世（3下）』

一 關兵部丞。

五拾貳貫四百拾貳文〔東郡〕 物島辻量。

四拾貫文 同 鶴間。

此内、廿八貫四百文。戌歳増。中郡 飯島。元大藤知行。

廿貫七百五十文 小大繩。同。

拾四貫九百卅貳文 小机一宮。元花濃知行。

卅壹貫文 河越世四郷 岩立。元中山孫七郎知行。

卅八貫七百文 以上百九拾七貫七百九十四文。

一 小山彌三郎。

四 百九貫八百十二文。

成瀬突卯檢地。小川同。高ヶ坂同。森同。木曾同。山崎同。町田。直ヶ谷同。眞光寺同。黒川同。鶴間同。金森同。大谷同。金井同。廣袴同。木倉。

一 油井領。

七 拾貳貫四百廿三文。久良岐郡 富部。臨江寺分。小山田庄 小野地。

五 拾貫文 東郡 溝上下。同 座間。同 栗飯原四ヶ村。同 落合。

武州 小山田ノ内岡村。

一 葛西様御領。

三 百九拾五貫百十文 長津田。小机 同 江戶 同 子安。平塚。品川。南北。

〔出典〕『統群書類従・第二十五輯 武家部』

〔出典〕『神奈川県史 資料編3 古代・中世（3上）』

〔出典〕『神奈川県史 資料編3 古代・中世（3下）』

〔出典〕『神奈川県史 資料編3 古代・中世（3上）』

【史料八】

三 寛政一二年 上相原村文禄年中より検地並  
寺社等控帳

寛政十二年庚申年二月 日  
相模国高座郡上相原村  
文禄年中より度々御検地  
並神社仏閣畑屋敷控帳  
当村  
吉川一

相模国東郡相原郷之儀は、只今武州相原村と一村ニ有  
之候処、文禄三年御検地御改之節川境ニ相成、依之  
相原村兩村ニ相成申候、東西は三里余も有之、下相原  
村と申候は、只今矢部と申候村方ニ御座候、中相原と  
申候は、只今小山・橋本と申候村ニ御座候、右矢部・  
小山・橋本等と申候は、其時分之字名ニ御座候處、自  
然と村名ニ相成、当村方計り文禄年中之通り上相原村  
と申候

文禄三年七月御検地之節田畑之數  
右は文禄三年より寛文中迄、上相原村神社・仏閣、  
御検地之度々別百姓屋敷書記申候、以上

(出典 『相模原市史 第五卷』)

【史料九】

○境川 東邊の郡界を流る故に此名あり、武州多磨郡  
中相原村と、津久井縣下川尻村の間より郡中橋本・上相  
原兩村犬牙の地に入り、夫より下鶴間村に至り、鎌倉郡  
の境を通じ、流末は鶴沼・片瀬二村 片瀬にては片瀬川と呼  
等詠歌あり、の間を通じて海に沃けり、橋本村より鶴沼村  
に至て九里餘、この川に傍へる村々にて用水とす、古  
名は高座川或は田倉川とも書く 太久良加波と云、本名は  
便りよきを以て、たくらと略語せしなるべし、其故は當郡及  
武州多磨郡の境、舊くは本郡の東二三町許を隔、多磨郡の内  
山の續ける邊を相武の國境とし、この川當時は全く當郡内を  
通じたれば、高座川の名起りしと土人はいへり、今上鶴間小  
山、相原等同名川の東西各郡に存せるは、中古より境川を以て  
國界とせる故なるべし、されど其變ぜる所以及年代を傳へず、

【史料十】

一 明治一二年 相原村皇國地誌

村 誌

相模国高座郡相原村  
往昔ヨリ本部座間郷ニ属シ、郡ノ北部ナル相模原  
(地勢ニ詳記ス)ノ北辺ニ位シ、粟飯原四ヶ村(小  
田原分限帳ニ拠ル、乃チ相原・九沢・大島・田名是  
ナリ)ノ一ニシテ古ヨリ我北境ナル横山(西ハ御嶽  
山ヨリ連続セル山脈ニシテ東ハ武州橋本郡へ延亘  
ス、該嶽ニ今高小蹊アリ、是在昔國界ノ余波アリ、  
藤原為相卿八王子ニテノ歌ニ「アケカタノミ空ノ外  
ノ子規タマノ横山ナイテスキケリ」トアルハ嶺北ハ  
武州多磨郡ナレハナルヘシ)ノ嶺頭乃チ相武國界タ  
ル、然ルニ天正十八年庚寅徳川氏ノ版圖ニ入テ、文  
禄三年甲午検地スルニ方リ、山南ノ我地ヲ流レシ高  
座川ヲ以テ國界トセシヨリ、川北ナルヲ武州相原  
(粟飯原ノ転ニシテ或ハ合原又間原トモ書シト)村  
トシ川ヲ境川ト改メ、又川南ナルヲ區別シテ相原上  
分同中分同下分ト記載ス(検地帳)、川北ノ武州相原

【史料十一】

支全 北條氏照書狀 ○上杉  
文書

遙々不通候之條、馳一輪候、先日枕流齋歸路以後、早々可  
及御返答處、敵動故遲々、重而枕流齋可申入候、雖然如聞  
得者、越中口爲御靜謐、于今彼口ニ被立御馬之由候條、先山吉  
方訖内義申届候、此飛脚ニ案内者被指副、無相違被相透可給  
候、萬一飛脚以下越山就被相留者、自其地山吉方へ之二札被  
相届、彼回報早々可給置候、憑入候、抑今度信玄不慮ニ至于  
武相出張候、白井峠打越、不移時日、當城へ客來候、信甲之  
者、年來覺悟を存、弱敵ニ候條、宿三口へ出人數、兩日共ニ  
終日遂戦、度々得勝利、敵無際限討捕、手負之儀者、不知其  
數候、兩日陣取、三日目ニハ夜中當地を引離、武相之境ニ候  
号杉山峠山を取越候、其上首尾一理ニ至于相州令一動、去五  
日、津久井筋退散候、自元切所可入様無之條、小荷駄以下切  
落、人數計致夜除候、六日早天、氏政ニハ未だ懸着候間、先  
衆四手五手之間取切所、懸足輕、敵押崩、宗之者數多討取  
候キ、敵除口ニ付而、亂備むたと山嶮組成方へ着着候人數者、  
此方ニも押なだされ候キ、併越度者無之候、山家人衆遺、自  
由ニ依不能成、今般信玄不討留事、無念千萬ニ候、猶以彼飛  
脚ニ案内者被指副、可給候、就無左者、山吉方へ之一札、速  
ニ被相届、返札待人候、於其地有遅々者、曲有間敷候、恐々  
謹言、  
(本條十二卷  
拾月廿四日  
全條 (花押)  
氏照 (金印)  
河田伯耆守殿)

(出典 『神奈川県史 資料編3 古代・中世 (3下)』)

(出典 『相模原市史 第六卷』)



図1 近世後期の相模・武蔵国堺  
(赤：現代の自治体、黒：古代の想定国郡域)

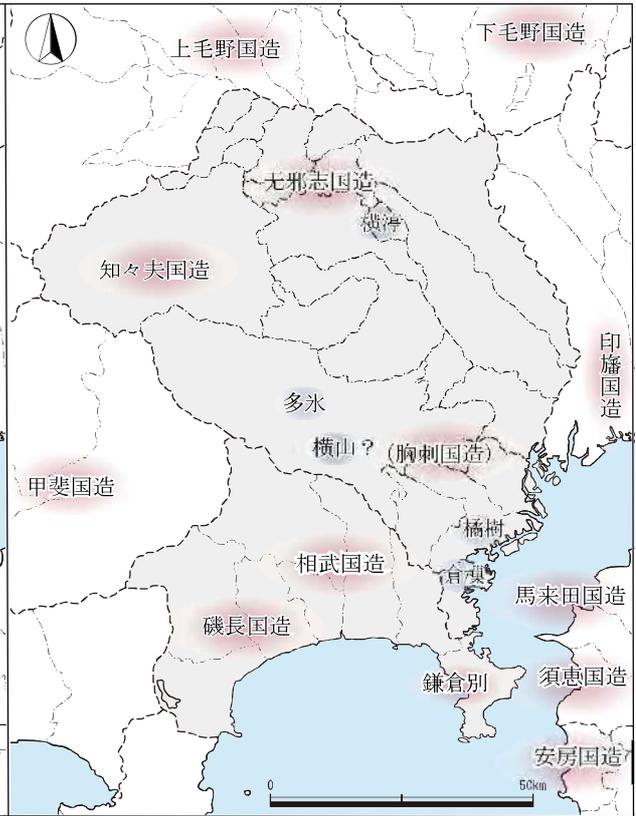


図2 国造領域概念図  
(赤：国造、青：武蔵国造の乱後に設置された屯倉)

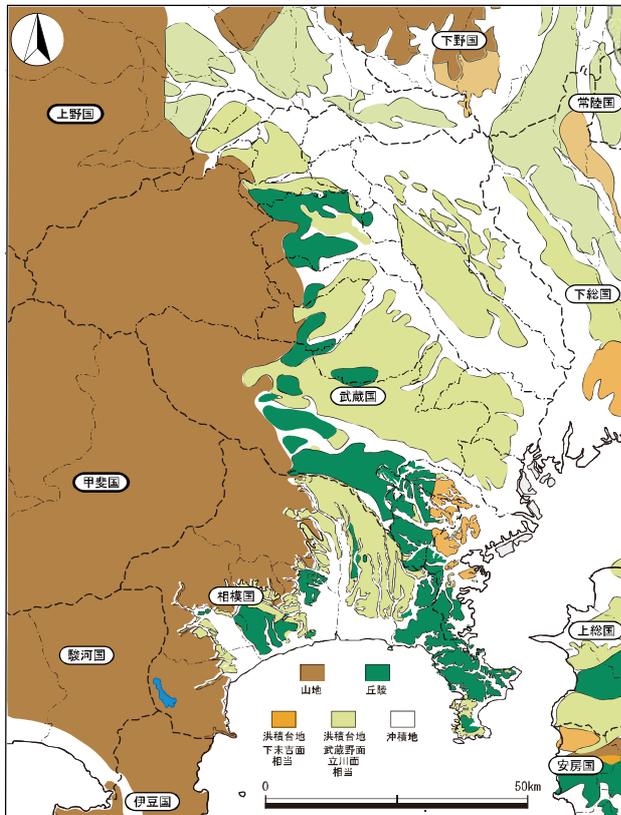


図3 相模・武蔵国を中心とした地形区分図

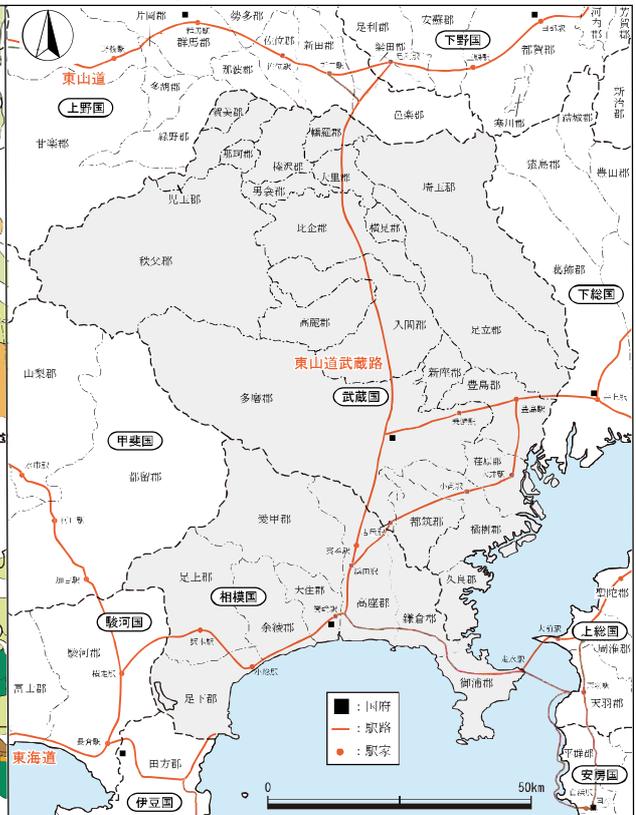


図4 古代相模・武蔵国の郡域と交通路  
(交通路は『日本古代道路辞典』八木書店 1994年を引用)

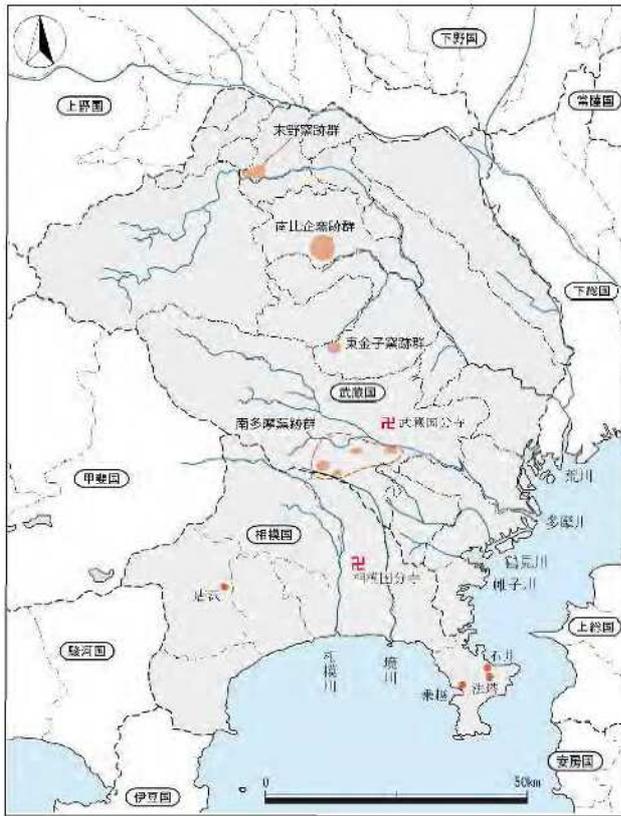


図5 相模・武蔵の両国分寺と瓦生産地

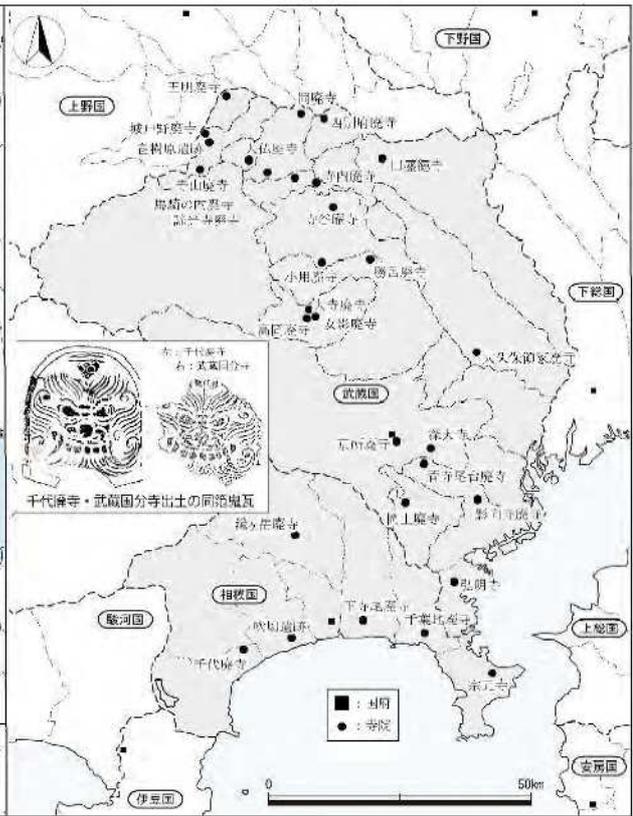


図6 国分寺を除く相模・武蔵の主要古代寺院分布図

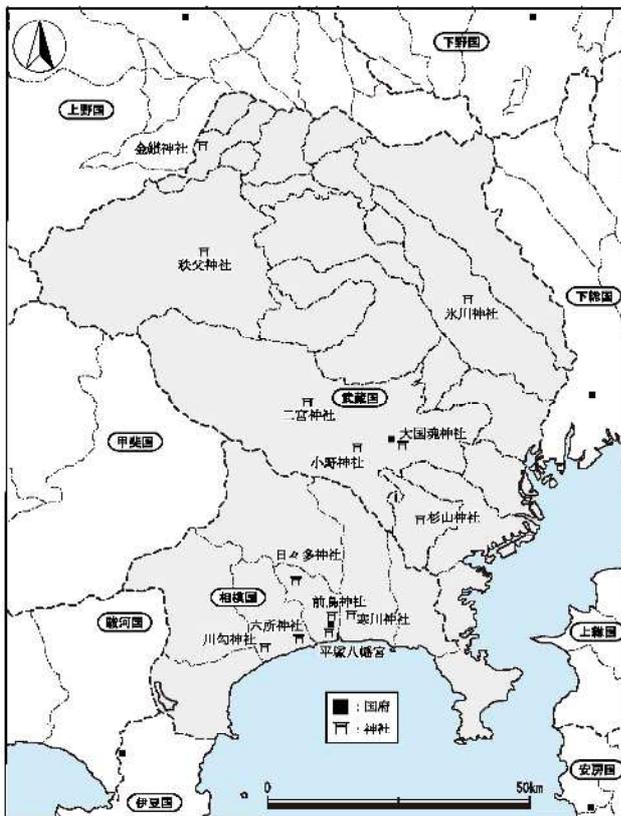


図7 相模・武蔵国内の総社・一宮

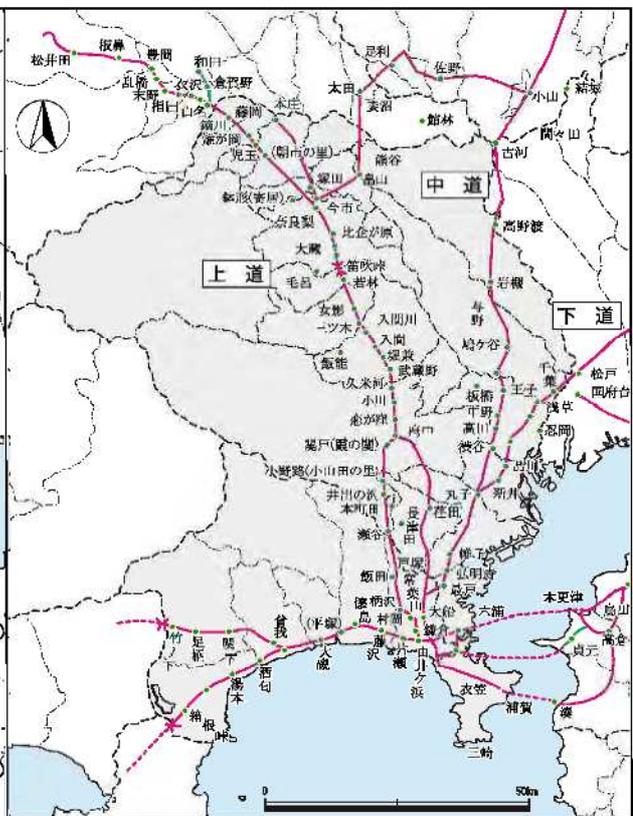


図8 中世の鎌倉街道  
(背景の地図は、古代の想定国・郡域を投影)